

---

# 人類の終焉

桐生学

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人類の終焉

### 【Nコード】

N0105D

### 【作者名】

桐生学

### 【あらすじ】

2012年、第5次中東戦争が勃発する。アメリカがイスラエル側に参戦することにより、日本は物資補給に限り、自衛軍を派兵することになった。翌年、派兵の期限が切れたことにより、撤退。戦局は均衡を保ち、次第に泥沼化していた・・・それにより、政府が期限延長をするのは、確実視された。しかし、国会の議決なしに政府が期限延長を断行したため、解散を余儀なくされる。政治空白の混乱に乗じて、抵抗勢力、社会民主労働党と自衛軍最高機関統合幕僚監部は自衛軍を担ぎ出し、軍事クーデターを敢行するが、事態は

予期せぬ展開に・  
・  
・  
・  
・

## 一 砂漠の戦場を後にして（前書き）

処女作です。なので読みづらいかもしれませんが、是非読んでください。

## 一 砂漠の戦場を後にして

最後に雨が降ったのはいつだったろうか。この砂漠には植物がほとんど生息しない。いや、生息できないのだ。日中は灼熱、夜は極寒の風。このあまりに過酷な砂漠、まさに地球の闇の部分と言ってもいいだろう。その闇が人類の行いによりますます黒くなっていく・・・

2012年2月より第5次中東戦争（1）が勃発し、イスラエルとパレスチナの対立を軸とした紛争はシリア、レバノン、イラク、イラン、サウジアラビアなどの周辺地域を巻き込み、アメリカがイスラエル側に参戦することにより規模も拡大していった。

日本の自衛軍（2）もアメリカの要請により翌月出兵。アメリカ軍の補給を限定（3）としているものの、第二次大戦以来初めてそして去年の憲法改定（4）からわずか一年足らずで戦争に踏み切ることになった。

本日3月2日、派兵の期限が切れ、一度帰国することになる。一年たった今も戦局は均衡、泥沼化していて、恐らく日本に帰次第、政府が期限延長を決めるであろうという見通しが強いため、無論喜びを表現するものは誰一人としていない。

戦場から遠く離れた広大な砂漠に拠点を張り、アメリカ軍への物資補給、兵士の治療に徹するのみだったが、それだけでも我々の精神を衰弱させるに事足りるものだった。

疲弊した兵士の退廃した眼差し、負傷者の凄惨な姿、とりまく絶望感・・・

また、敵軍が我々の拠点を攻め込むかもしれないという緊張感、恐怖、それはまさに戦場にいるのと同様だろう。まさに我々は戦争をしているのだ。

しかし、この暗闇の中、我々を灯し、導く一抹の光、強く、まぶしい篝火が存在した。

「ここまでわが方が疲弊しているということは、あちらも尋常でないはずだ。こういう戦局は氣力が左右する。引いてはいけない。押し通した方が勝利を手にする。我々は決して屈しない。ゆえに我々は必ず勝つのだ。」

日本の自衛軍の士官である。無論彼は戦場に立つ人間ではない。彼は戦の指揮を執る人間でもない。彼にはこのような発言をする資格はないはずである。しかし、彼の声が疲弊した兵士の耳を傾けさせ、彼の姿が兵士の目を見遣らせる。端麗な容姿、内からみなぎる力強さ、兵士たちはその姿に目の輝きを取り戻し、息を吹き返す。

「友よ、我々はすぐに帰ってくる。その時にはこの戦に幕を下ろす。」

流暢、それでいて力のこもった英語で甦った友たちに別れを告げた。

一条一士（5）は帰国の航空機の席に腰を下ろした時、緊張から解き放たれ、重い疲労感をズッシリと感じた。周りの人間も同様であり、皆、顔に疲労感が顕になっている。

（再びこの地獄に戻らねばならないのか……）

胸に憂鬱を抱きながら、一方体は眠りにつこうとしていた。

「一年という歳月、大変ご苦勞であつた。たつぷりと休んでくれたまえ。そして奇なる縁のない限り、我々は二度とこの地に立つことはないであらう。」

（誰かが喋っている……誰だ？そしていたい……）

「日本に帰り次第、君たちには特別な任務が待っている。砂漠の戦に続き、少々酷ではあるが……」

（特別任務……）

意識が薄れる瞬間、微かに、しかしはつきりそう聞こえた。

1 イスラエルがイスラム原理主義政党排除のためにパレスチナ自治区へ侵攻、イスラエルの占領により、生き残った黨員とパレスチナの難民はヨルダンへ逃れた。イスラエルは残存黨員完全排除のため、ヨルダンへ侵攻。また占領拡大のため、レバノンにも侵攻。それらに伴い、シリア、イランがイスラエルに宣戦布告。

2 自衛軍Ⅱ2011年、中華人民共和国の台湾侵攻の際に、防衛強化のため自衛隊から再編された軍隊。自衛隊と同様、他国の侵略から自国を防衛する軍隊で、自ら侵略、交戦はできない。台湾は同年、占領・合併された。

3 この時点では集団的自衛権を有していない

4 9条の「戦力不所持」の項を削除。

5 一士〃一等兵に相当。



## 二 戦士の帰還（前書き）

あらすじを多少修正させて頂きました。また、一の方に追加しました。

## 二 戦士の帰還

社会民主労働党党首室にて

「本日自衛軍が中東から帰ってこられますね。」

「先日内閣も解散され、現在政治的空白状態が続いている。全て予期した通りだ。」

「先生がおっしゃった通り、やはり政府は国会での決議なし、無断で期限延長の条約履行を断行しました。」

「所詮は流れに身を任すことしかできない俗物どもだ。主体性を放棄し、今にも溺れ死にそうでなにかにしがみつくことで必死なのだ。」

「統合幕僚長（ ）の方は？」

「高木なら信用できる。わが同志でもあり、思想も共有できる。そしてなにより驚くべきは行動力。計画の方も問題はなに一つ見当たらなかった。」

「自衛軍員20万というのは大胆ですね。これなら国家の機能をも容易に……………」

「そうだ。そして無血による転覆。軍を用いるといっても、民主的でなくてはいけない。国民がついてこなければ、革命とは言えない。なにより自らの主義に反してはいけない。あるべき姿を見誤らず、意志を貫き通せば天も我らを許すであろう。」

「新たな時代が始まりますね。」

「いや・・・・・・・・歴史を書き直すのだよ。」

日本に帰還した一条は国の変わり果てた姿に驚きを隠せなかった。

（海の向こうの戦争により、ここまで国が、世界が危機に瀕しているとは・・・・・・・・）

中東の動乱のためにかつてないほど石油が高騰していた。インフレに襲われ、財政破綻により、政府が機能していない国もあった。

日本も政府の市場介入や、貿易の制限、消費税引き上げなどの政策により財政はなんとか保たれているが、国民は困窮し、その不満の矛先は無論政府に向けられ、連日デモや、反戦運動が繰り広げられていた。

そして、自衛軍に所属する一条としては政府が無断に断行した期限延長に一瞬驚きを見せたものの、直ちに全てのことを理解した。

政府は戦争はすぐ終わるという口上により、世論を黙らせるだろう。そして次の内閣が組閣され、新しい首相が就任しても、うわべばかりが変わるだけである。

（そんな安易なものではない。戦局が均衡していて、すぐには終わらないだろう。それは俺たちが一番知っている。仮に終わったとしても、それ以上に再建の時間がかかる・・・・・・・・）

一条は内心憤ったものの、それを表情に出すことはせず、朝食をとりに軍宿の食堂へ向かった。

統合幕僚長⇨防衛大臣の補佐機関、統合幕僚監部の最高議長（自衛軍最高職、最高士官）。陸空海軍を一体的に運用可能。

### 三 原点なき者たち（前書き）

一の 1 にて実際に存在する政治団体の名前を誤って挙げてしまったため、修正しました。

### 三 原点なき者たち

食堂にはもう他の軍員も席について食事をとっていた。一条は食事を受け取ると、自分と呼ぶ、聞きなれた声を耳にする。

「一条、俺の横座れよ」

呼び声の主は仲本一士だった。

一条が席に腰を下ろすと、仲本は一条に喋りかけた。

「おはよう。どうした？うかぬ顔をして」

「お前も今朝の新聞に目を通しているだろう？」

「ああ………」

「こちらにはまったく余裕がないようだ。解散してまで即座に期限延長を決めたんだからな。」

「俺たちが駐留していたイラク東部はイランの猛攻にあっているからな。そして地理上あそこを落とされたらまずい。」

「イラク内部の反乱分子も掃討しなければいけない。あそこは今回の戦局を大きく左右する。」

「だが、砂漠の砂に紛れたゲリラ戦法にアメリカ軍は相手手こずっている。」

「空爆は無意味だからな。圧倒的物量に慢心していただけに、ここまで膠着するとは思ってもいなかっただろう。」

「そうだなあ………ところで、お前が気にしているのはそのことか？」

「……………」

仲本は続けて話す。

「お前が気にしているのは、それにもかかわらず、俺らがこんなところでのんきに朝飯を食べていることだろ。」

一条はは仲本から目をそらし、目の前に並ぶ食事に目をやった。

「政府が期限延長をしたのになぜ俺らは戻らない！そして……………」

「特別任務か……………」

「……………」

二人は腑に落ちない様子で食事を再開した。

一年の壮絶なる戦い、政府の解散、不可解な軍の動き、話題に困ることはなく、帰郷による精神的な安堵から軍員同士の会話がいたる所で聞こえ、ざわめきとなっていた。

仲本はもう食事を終え、

「ここの飯がこれほどうまく感じたのは初めてだ。」

「そうだなあ……………」

彼らの会話が戦地の状況を語る。

仲本は立ち上がり、食事を下げに行こうとし、立ち上がったが、なにかを見つけ、即座に席に座りなおした。

「どうした？」

一条は仲本の方を向いた。仲本は驚きの表情を見せた。

「あれを見る。」

二人は食堂入り口の方に目を向ける。

「あれは……………」

ざわついた場に静けさが甦った。

そこにいた軍員、皆全て驚きの表情を隠せなかった。

なぜなら、この場に現れるはずのない人間が二人も現れたからだ。

「あれは山本一尉（ ）と高木統合幕僚長……………」

山本一尉は先日、一条たちの部隊で指揮をとっていた男。容姿端麗、堂々とした風格の持ち主で人望も厚い。先日、アメリカ軍に別れの言葉を述べた。



高木は高齢ではあるが、生気を失っておらず、なおかつ知的。軍の最高士官としてふさわしい風格である。

山本と高木が前に立った時、軍員は既に皆起立していた。

「敬礼！」

山本は大きく力強い声を張り上げる。その言葉に続いて軍員は皆敬礼した。

敬礼が終わり、高木の話が始まった。

「まずは一年間ご苦勞であった。君たちの部隊は今回の戦争で一番激しい、イラク戦線であり、初めて戦場という地に足を踏み入れ、戦争というものを初めて体験した。君たちの肉体的、精神的疲労は計り知れないものであっただろう。また駐留期間、我が方が落とされなかったのも、君たちのおかげであったであろう。誇りを持つてほしい。」

軍員全員が真剣なまなざしで高木の方へ目を向けていた。彼らは疲れを忘れたかのように、目を輝かしている。

「そして、君たちがなぜここにいるのか。なぜ私と彼がここにいるのか。皆が疑問に思っているだろう……」

高木は一呼吸間をおいた。

「君たちに問おう。この戦争に意味があったのか？我々が終わらせなければいけないのか？我々に責任があるのか？戦う義務があるのか？」

か？」

また一呼吸間をおいた。

「友のため？海に向こうの友の国のため？では彼らはなんのために戦っているのか、そのことを我々は理解しているのだろうか？理解せずに友と呼び合えるのだろうか？」

軍員の中に動揺を見せ始める者も見られた。隣に立っている山本はいたって冷静な表情であった。

「目的など初めからなかったのだ。我々は・・・・・・・・」

呼吸をおくごとに高木の演説は強い口調に変わっていった。

「間違った方向に流されてはいけない。我が国の現状を見て驚いた者も多いだろう。政治は腐敗し、国民は困窮し、我々を根本的に否定する反戦デモも日に多くなってきている。」

高木のこの口調、リズム。この場にいた軍員は皆、高木の演説に知らず知らずのうちに魅入られていた。

「間違いは修正する。間違った者は肅清する。正しい方向に導く力を我々は持っている。君たちに未来を、あるべき姿を切り開いてほしい！」

当初感じていたが、そのうち考えるのをやめた疑問、欺瞞が再び軍員に甦った。高木の言葉はそんな彼らの心を打ち、心地のよいものであった。

一尉  
〃大尉に相当。

四 國を愛して、國を憂える（前書き）

三の を修正しました。

#### 四 國を愛して、國を憂える

「では具体的な話に入ろう……」

一呼吸……この一瞬の間隔が、歩みを止めてしまった者にはあまりにもどかしかった。皆、己の進むべき道を指し示して欲しいのだ。歩き続けることしか知らないのだから……

「まず解散前の政府が決定した期限延長には、クーデターを敢行することによって反対の意志を表明する。このまま政府の横暴な悪政に國や、國民には耐える力が残されていないだろう。混沌を迎える前に、今すぐに手を打たなくてはならないと我々は決意したのだ。真にこの國を愛するがゆえ、武力を用いても転覆を、憂えるがゆえに放伐をなさねばならない、この國を衛るために……濁流は塞き止めて清めねばならない。」

その場にいた者たちに、それが正しいことなのか判断できる者は少なかっただろう。彼等の多くがとうの昔に善悪の概念など切り捨てていたのだから。

「作戦は陸軍20万をもつて議員、その親族、駐留米軍の身柄を拘束する。これらは容易な任務であろう。だが、君たちの部隊は今回の最重要任務を担ってもらう。イラク戦線に続き酷ではあるが……だが、イラクの土を踏んだ君たちだからこそこなせる任務だと思っている。作戦内容はこの後、山本一尉から話してもらう。以上が今回の主旨である」。そして最後に……。正義は我々にある。安ずることなかれ。前途に光明を見出だすために、天から授かりし鉄鎚を今こそ下そう！諸君らの健闘を祈る。」

「敬礼！」

山本の声に皆が続く。

「では一尉、後を任せます。」

敬礼が終わると、高木は静かにこの場を後にした。

## 五 刻は狂い始めた

「席に座って楽にしてくれていい。」

山本がそう言うと、軍員は静かに腰を下ろす。

「任務の内容の話をする前に少し現在の軍の状況を整理しておきたいと思う。帰国してからすぐの話で困惑しているだろう。」

高木の話聞き高揚した者、また困惑した者、山本は軍員の複雑な心理状態を把握していた。

「政府解散により、総理大臣と防衛大臣が不在になっている。よって陸空海の指揮、運用の全権を統合幕僚監部が担っている。このことは皆も承知しているであろう。そして今回のクーデターを高木統合幕僚長が立案、会議の末議決された。これはちょうど一週間前に決まったことらしい。ゆえにどのようであれ、我々軍人は上からの任務に従い、この任務を必ず遂行せねばいけないのだ。」

今回のクーデターは軍紀に違反しているものではなく、軍もいたって正常に機能している。

「では今回の任務の話に移りたいと思う。今回ここ箱根駐屯地第十二師団から200人ほどの中隊を結成し、私が指揮官として率いる。任務内容はある政治的重要人物の身柄の確保、保護にあたる」

ある人物とは？山本はあえて抽象表現で間を置く。それも次の具体を強調するためのレトリックなのだろう。

「そのある人物とは……日本国国家元首、及びその親族。首都東京の皇居を強襲し、天皇及び皇族全員の身柄を確保、保護するのが今回、我々の任務。そしてこの度のクーデターの最重要任務である。明朝任務を開始する。本日は後ほど隊と作戦内容の説明をする。」

時計の針が今、その歩幅を大きく広げた。正常なる刻の流れは基点を失い、ゆっくりと……ゆっくりと……狂い始めていった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0105d/>

---

人類の終焉

2010年10月10日18時43分発行